

ニコライ・フォードロフの思想形成とその諸要因

小 俣 智 史

1. 問題の確認

ニコライ・フォードロヴィチ・フォードロフ（1829-1903）は存命中に世に知られることのなかった思想家であり、与えられた評価の大部分は彼の死後のものである。後世の人々のフォードロフに対する評価は賛否両論あるが、おおよそ3種類に分けられる⁽¹⁾。第一に、フォードロフの長年の友人でありその弟子とも言われるH. II. ペテルソンのように、人為的・物質的な復活説を含めてフォードロフの思想全体を支持するものが挙げられる。第二に、フォードロフの復活説などを荒唐無稽だと批判する評価、あるいはそれをキリスト教の正統的な理解から見て異端的とみなす評価がある。ここには、C. A. ゴロヴァネンコやГ. B. フロロフスキーなどが含まれる。そして第三に、フォードロフの復活論などについては批判あるいは保留しつつも、それ以外の側面（能動的キリスト教、マルクス主義との関連など）を評価する立場がある。B. A. コジェヴニコフやC. H. ブルガーコフ、H. A. ベルジャーエフ、ユーラシア主義左派がこの立場をとった。また、フォードロフと同時代のB. C. ソロヴィヨフもこの立場に含まれるだろう。

このように、20世紀前半までのロシア思想史の文脈に沿うならば、フォードロフへの評価は上記の第二のもの（異端性の指摘）と第三のもの（復活説など極端な説を避けたフォードロフへの評価）へとはっきりと分かれているように思われる。では、こうした状況にはどのような背景があるのだろうか。

筆者は以前、フォードロフ死後にその思想を広めようとしたコジェヴニコフとペテルソンの戦略の違いを指摘することで、この問題に対する説明を試みた⁽²⁾。以下では本稿での立論に必要な限りにおいて拙論の内容をまとめつつ、そこに欠けている点を明らかにする。

フォードロフの死後その思想の普及活動を担ったコジェヴニコフとペテルソンは、その活動のアプローチにおいて異なる道を選んだ。ペテルソンがE. H. トルベツコイとの論争の中でフォードロフの思想の極端さを際立たせてしまった一方で、コジェヴニコフはフォードロフの思想の穏健化に努めた。こうしたコジェヴニコフのフォードロフ理解は後にブルガーコフ等のフォードロフ理解に影響を与えたと考えられる。このように、フォードロフに対する上記の第二、第三の評価がペテルソンとコジェヴニコフの立場の相違に一因を見出せるのではないかと拙論では考察し

た。

しかし、そこには依然として考察すべき問題が残されている。すなわち、ペテルソンとコジェヴニコフの立場の違いが両者のフォードロフ理解の差異によるものならば、それを導く要因は何だったのかという問題である。紙幅の都合もあり、拙論ではこの点についての考察が十分に行えなかった。本稿はそれを補う試みである。

本稿では、この試みのために次の仮説を立てる。第一に、コジェヴニコフとペテルソンの戦略の違いを生んだ原因として、実はフォードロフ自身のテキストに両者の傾向が先取りされている可能性があると考え。次に、フォードロフのテキストにそうした傾向の違いがあるとすれば、それは彼の思想形成やテキストの成立年代に関連しているのではないかと考える。これらの仮説の証明のために、本稿ではフォードロフのテキストを前期と後期に二分し、その後、それぞれの時期に書かれたテキストの傾向とそれが生じた背景について検討してゆくことにする。

2. フォードロフのテキストの成立年代

2-1. 前期と後期の区分

本稿のようなアプローチが従来の研究で顧みられなかった原因は、フォードロフのテキストの成立年が正確に把握できないという点にある。彼の代表的著作とされる『共同事業の哲学 *Философия общего дела*』（第1巻は1906年、第2巻は1913年に出版）は死後に編纂・出版された論集であり、そこには各論文の成立年は明記されていない。ゆえにこれまでの研究ではすべてのテキストがあたかも一時に書かれたかのように扱うのが一般的であったのだが、そのような態度は20年以上の長きにわたり執筆を続けた思想家のテキストを扱う手際として正しいとは言えないだろう。実際、1995年から2000年にかけて出版された4巻本の著作集の註釈には詳細な考証が付されるなど、各著作の正確な成立年は推定不可能であっても、およその年代を推定する試みについてはまったく行われていないわけではない⁽³⁾。

このテキストの成立時期の問題を考察するにあたり重要なのは、ペテルソンの以下の証言である。

ソロヴィヨフが通読した手稿は、H. Ф. フォードロフの言葉を私が口述筆記したものである。私はその内容を熟知しており、この手稿が（もちろんある程度加筆はされたが、主要な部分、本質的な部分には加筆していない）『共同事業の哲学』第1巻の64頁の、「概ねロシアが生じたその時からおよそ1000年の間イスラム教と絶え間なく戦い続け…」という言葉からはじまり、345頁から346頁にかけての、「世界が自然や盲目的力へと退化していること…それはいづれにせよ、際限なく続く現象ではない。なぜなら、盲目的力の他に、地上においてのみとはいえず、理性的力もまた存在し、人間と自然の間には対立がなく、人間と自然の分離は一時

的なものであるのだから。だからこそ、この退化状態を取り除くこと、その退化の犠牲を復元することは、死を運命づけられた人間、死せる父たちの子たちの課題である」という言葉で終わることを証言できる。⁽⁴⁾

この引用文には若干の説明が必要だろう。ペテルソンは1877年12月に Ф. М. ドストエフスキーへ書簡を送り、フョードロフの思想を恐らくは断片的に紹介した（この書簡は残されていない）。そして、78年にドストエフスキーからの返事を得て、さらに詳しい説明を加えるべくフョードロフとともに原稿の執筆に着手した。この原稿はドストエフスキーの死（1881年）の後、1881年秋に Л. Н. トルストイ宅で出会った若き哲学者ソロヴィヨフに手渡された。上掲の引用文で言及されているのは、この時ソロヴィヨフに手渡された原稿のことである。ここでペテルソンが証言している箇所が正しいとすれば、1881年までにフョードロフがペテルソンとともに書き上げたのは、『共同事業の哲学』第1巻所収の『兄弟性、あるいは親縁性に関する問題、世界の非兄弟的、非親縁的状况、すなわち非平和的状况の原因に関する問題、そして親縁性の復元の手段に関する問題（無学な者たちから学識ある者たちへ、僧侶と俗世の人々へ、信仰のある者たちと信仰のない者たちへあてたメモ） Вопрос о братстве, или родстве, о причинах небратского, неродственного, т. е. немирного, состояния мира и о средствах к восстановлению родства (Записка от неученых к ученым, духовным и светским, к верующим и неверующим)』（以下『兄弟性に関する問題』と表記）の第2部（冒頭を除く）から第4部までということになる。その後、1890年前後まで主にこの『兄弟性に関する問題』への加筆を続けていたフョードロフが再びあらたな形で執筆を行うのは、1890年代から没年（1903年）までのことであった。

このように、フョードロフが集中的に執筆を行った時期、あるいはみずからの思想をまとめた時期は、ドストエフスキーに自説を示すために原稿をまとめた時期である1878年から1881年前後と、その原稿に加筆していた1881年頃から1890年頃まで、そして1890年頃から没年である1903年までに大別することが可能である。本稿では1881年にソロヴィヨフに原稿を見せた段階でテキストが一定の完成をみたと考え、便宜上、1881年を画期としてその前後の時期を「前期」と「後期」と呼ぶこととする。

続いて、以下ではそれぞれの時期のテキストで実際に扱われているテーマについて検討してみよう。

2-2. 前期フョードロフ

まずは前期フョードロフの思想内容から見てみよう。ここで主に対象とするのは、先に言及した『兄弟性に関する問題』の第2部、第3部、第4部である。もとよりフョードロフの記述スタイルは論理的一貫性を欠いているため、以下では各部で取り扱われている主要なテーマについて

概括する。

『兄弟性に関する問題』の第2部で扱われているのは、復活や三位一体といった概念のフォードロフ流の解釈である。「三位一体には死の原因がなく、不死の条件のすべてが含まれている」⁽⁵⁾として三位一体に死の克服を見出したフォードロフは、同時にそれを全人類からなる全一的共同体の理想とみなす。そしてこの理想的共同体、地上における「神の国」を成立させるための方法として洗礼や聖体礼儀が理解され、さらには死者の復活が要請される。フォードロフの考えでは、このアイデアは十戒をはじめとする聖書の戒めによりキリスト教徒に要請され、また非キリスト教徒にとっても「父の死に対する子の悲しみは真に世界的である」⁽⁶⁾ことから是とされる。

続く第3部では歴史の問題が主に扱われている。歴史を神のような超越的存在にもとづくものとする宗教的歴史哲学や、進歩・発達といった概念あるいは動物形態論に沿った法則で考えようとする立場に対して、フォードロフは歴史の意味をキリスト教的事業（「キリスト教とは死者たちを復活させるために生者たちを一つにまとめることである」⁽⁷⁾と彼は述べている）に結びつけている。これまでの歴史とはいわば人が歴史の行為者となる前段であり、上述のキリスト教的事業がなされることではじめて歴史は意味をもつとフォードロフは考えているのである。第3部の後半では、こうした歴史観にもとづいてコンスタンチノーブルとパミールを中心に歴史を振り返り、ロシアの意義をキリスト教的事業に見出している。

「我々の課題とは何か」と副題をつけられた第4部では、フォードロフのいう「計画」の実践的側面が扱われている。ここで彼は農村と都市、民衆とインテリゲンツィアや学者、農村の生と学問的知（科学）、農業と商工業の分裂を批判して、それらの和解を主張している。飢餓に代表される食糧問題と死を招く衛生問題は、これらの分裂が解消される時に解決されるはずだとフォードロフは考える⁽⁸⁾。具体的に言えば、食糧問題はB. H. カラージンが考案したように科学的に気象をコントロールすることで解決が可能であり⁽⁹⁾、同様に死体から生じる疫病についても科学で解決できると考えたフォードロフは、「衛生問題の根本的解決は、分散した粒子を、それらを最初に持っていた存在に返すことである」⁽¹⁰⁾と述べている。衛生問題に端を発する死という現象の解決可能性は、肉体の再創造や死者の復活さえも人の手により実現することができるというフォードロフの復活説の物質主義的性格に結びつくことになる。

加えて、従来の研究においてフォードロフの思想の形成時期を指摘するためにしばしば言及されてきた2つの断片にも触れておこう⁽¹¹⁾。フォードロフはここで、「この新しいパスハ、すなわち誕生・出産に代わる全般的復活[というアイデア]が現れたのは(1851年の)秋のことだった」⁽¹²⁾と述べており、またこの復活の思想について、「我々を通じて、つまり理性的存在を通じて自然が十全なる自意識と自己制御を獲得するという思想は、あらゆる破壊されたもの、あるいはいまだそれが盲目であるがゆえに破壊されつつあるものを再創造し、そのことによって神の意志を遂行し、神の似姿、自己の創造者の似姿となる」⁽¹³⁾という思想だと説明している。これによ

れば、フォードロフが1851年に考え出したのは、誕生や出産に代わる復活というアイデアであり、また自然の一部たる人間が自然の力を統御し、そのことにより人間が神の代理を務める、似姿になるというアイデアであった。

また、ペテルソンは回想録の中で、フォードロフと出会ったばかりの頃（1864年3月）のことについて、次のように述べている。「この頃ニコライ・フォードロヴィチ〔訳注：フォードロフ〕が私に語ったのは、我々の存在が、昨今考えられているように無目的なものではないこと、我々が無意味に存在した後跡形もなく消えてしまうよう運命づけられているのではないこと、そして我々の目的が全般的復活、あらゆる失われたものの復元と不死の生命であることだった」⁽¹⁴⁾。続く箇所では、進化の過程で理性的存在たる人間が生まれた意味を自然の統御と復活に求めるというフォードロフの基本的な立場や、父性（отечество）をともなわない友愛（братство）、人間相互の関係への批判、学者たち（学問）の在り方への批判、社会主義批判といったフォードロフ思想のエッセンスともいべきアイデアを当時のフォードロフが抱いていたことをペテルソンは証言している。

以上の検討から、前期フォードロフの思想傾向が浮かび上がってくる。『兄弟性に関する問題』の第3部や第4部などで展開されたロシアの意義に関する論を除けば、この頃のフォードロフの関心は、同著作の第2部や第4部後半に見られるように、キリスト教の諸概念（復活や三位一体）のリベラルな解釈と、そこから導かれる宗教的使命を科学的・内在的な方法により達成しようとする志向にあるといえる。ここには、彼にとって根本的な二つの問題が透けて見える。それは、第一に、家族の結びつきを断ち切る死への抵抗とその究極的なあらわれとしての復活に関する問題であり、第二に、宗教と科学の一致という問題である。

上掲の断片にある通り、フォードロフは1851年に復活の思想へと考え至ったわけだが、それは父代わりとして自分を養っていた叔父の死を経験した年のことであった。当時オデッサのリシェリエフスキー・リツェイの室内作業学科でおそらく自然科学や経済学について学んでいたフォードロフにとって、その復活の思想が科学的方法と結びつくことに不思議はなかったのだろう⁽¹⁵⁾。そうしたアイデアは、三位一体などのキリスト教概念と結びつき、やがて、宗教的な目的を科学的・学問的アプローチにより達成するという思想の方向性、フォードロフ自身の言葉で言い換えるならば、「ありとあらゆる種類の知は神聖な意味を手に入れ、万人の復活の事業、聖体礼儀の事業に参加する」⁽¹⁶⁾という方向性をフォードロフに与えたと考えられる。

2-3. 後期フォードロフ

以上の検討結果をふまえて、以下では後期フォードロフの思想について見てゆくことにしよう。ここでは、原理的には上で触れたテキストを除くすべてのテキストが検討対象となりうるが、それらを逐一検討することは不可能である。そこで本稿では、90年代以降に書かれたことが明らか

であり、同時にある程度の分量をもつテキストを対象としたい。具体的に言えば、『兄弟性に関する問題』の第1部と第2部冒頭部、『教会統合の計画 Проект соединений церквей』、『専制 Самодержавие』、『超道徳主義、あるいは全般的ジンテーゼ（すなわち全般的統合） Супраморализм, или всеобщий синтез (т. е. всеобщее объединение)』（以下『超道徳主義』）を対象とする⁽¹⁷⁾。

1881年から90年代初めにかけて書き加えられたとみられる『兄弟性に関する問題』の加筆箇所（書簡などから第2部冒頭の第1節、第2節と推測される⁽¹⁸⁾）は前期に書かれた『兄弟性に関する問題』の第2部から第4部の導入部として書き足されたようで、主にロシアの歴史的意義についてまとめられている。ここで目新しいのは、祖先崇拜が「唯一の真の宗教」⁽¹⁹⁾とされ、キリスト教の三位一体と重ねあわせられていることである。祖先崇拜についての言及は1881年までに書かれたとされる『兄弟性に関する問題』の第2部や第3部にも見られるが、この加筆箇所ではそれがより強調されている⁽²⁰⁾。

1890年代前半に書かれたと考えられている『兄弟性に関する問題』の第1部では、主に学問や科学、そして学者の本来のあり方が扱われている。フョードロフは1891年に起きた飢饉や同年アメリカで行われた人工降雨の実験、あるいは先述のカラージンの気象統御説に言及し、「不作や死を招く疫病を引き起こす力の研究、すなわち死をもたらす力としての自然の研究をすること」⁽²¹⁾や「学者でも無学な者でも、すべての人々を盲目的力の研究・統御という事業においてまとめること」⁽²²⁾こそが学者の本来の使命であると述べている。そして、こうした使命や目的を欠いていることが現在の科学や学者階級の問題点であるとみなし、西欧の知、とりわけ「ヨーロッパの思惟の最終的帰結」⁽²³⁾である実証主義や進歩主義、社会主義を槍玉に挙げている。フョードロフはこうした学説に復活の思想を対置して、前者を批判しつつ後者の正当性を証明しようとしている。このテキストは、前期のテキスト（特に『兄弟性に関する問題』の第4部）で扱われた学問や科学の在り方について再び論じたものだが、類似のテーマを扱いながらも復活の具体的方法への言及がないという点で特徴的である⁽²⁴⁾。

この『兄弟性に関する問題』の第1部と同じく1890年代前半に書かれたとされるのが、『教会統合の計画』である。この著作は復古カトリック教会と正教会との接近という当時の話題にもとづいたものであり、その前半部でフョードロフは、「あらゆる分離の中でも最も忌むべきは教会の分離である」⁽²⁵⁾と述べながらも、儀礼における不一致を顧みずに教理における一致を目指すことを批判している。同著作の後半部では、こうした批判の矛先はソロヴィヨフの講演『中世的世界観の没落について Об упадке средневекового мирозерцания』⁽²⁶⁾（1891年）へと向かう。同講演でソロヴィヨフが上述のような不一致に目を瞑って他宗派への寛容を唱えていること、本来他宗派への寛容や敬意ではなく思想の一致を必要とするはずの「共同事業」が不可欠だと認めていること、またこの講演でソロヴィヨフが「共同事業」に触れながらもそれを形而上学的な表現で

抽象化していること、復活について理解していないことをフォードロフは批判している。このように、ソロヴィヨフとフォードロフ自身の見解の相違を明らかにしているという点でこの著作は意義深い。また、この著作でフォードロフは儀礼、とりわけ合唱（ハレルヤ）に言及しているが、そのことは、次の『専制』における専制やツァーリの問題とあわせて、教会儀礼や専制といった象徴性の高い文脈に対して当時のフォードロフが関心を寄せていたことを物語っており、その点でも興味深い。

続いて、1890年代後半のテキストの検討に移ろう。『専制』は1895年以降に書かれた三つの小論を一つにまとめたものであり、第一の「ツァーリの称号の歴史的意味についての再論 Еще об историческом значении царского титула」では、「すべての民族の力を一つの力へとまとめること」⁽²⁷⁾と「戦争に用いられる武器を別の武器、盲目的力によって引き起こされる災いから人類を救うための武器に変えること」⁽²⁸⁾を役割とする存在としてのツァーリ理解が述べられている。続く「ソロヴィヨフにより問われた『ロシアとは何か』（『ルーシ』紙1897年第37号）という問いに対する1878年3月23日付のドストエフスキーの手紙に基づく答え Ответ на вопрос—«Что такое Россия», заданный В.С.Соловьевым (газ. «Русь» 1897 г. №37-й), ответ, основанный на письме Ф.М.Достоевского от 23 марта 1878 года」（以下、「『ロシアとは何か』という問いへの答え」）はソロヴィヨフの『ロシアとは何か Что такое Россия?』（1897年）に上述のようなツァーリ理解をもって答えたものである。そして、第三の小論「専制 Самодержавие」では専制と議会制を対比し、前者のもつ宗教的意味について論じている。以上の三つの小論の内容をまとめるならば、ロシアの意義をその地理的、歴史的条件からとらえようとした前期とは異なり、この著作でフォードロフは専制のもつシンボリックな意味に着目し、それをもってロシアとツァーリズムの存在理由を主張しているといえる。ここでは、前期から一貫して見られたロシアの世界史的意味や全人類の統合、そして科学による気象のコントロール、より具体的には軍事技術を自然のコントロールの道具へと転用するというアイデアがツァーリ論という一点で交差している。

最後に、フォードロフの死去の前年、1902年頃（構想は1900年）に書き上げられたとみられる『超道徳主義』についても検討しておこう。この著作はそれまでのフォードロフの思想全体をまとめたような性質をもち、体系性を意識して書かれた印象の強い著作である。ここでの主題は、社会的な問題をはじめ多様な問題を提起し、その解決を復活説へと一元化することにある。

この著作は前半部と後半部に分かれており、前半部冒頭で貧富の問題（外面的不和）と学者と無学者の分離の問題（内面的不和）を解決すべき二つの問題・不和として掲げたフォードロフは、「パスハの問題」と名付けた12の問題を列挙する。このとき、特に重視されているのが貧富の問題である。彼自身の言葉を引くならば、次のようになる。

人の手で作られ出される貧困と富はあらゆる悪の源泉となり、残りの11の問題を引き起こす。

富への志向は生ける宗教を死せる宗教に変え（第2の問題）、人間を自然に対する偽りの状態に置き（第3の問題）、理性を分裂させ（第4の問題）、感情を官能や（第5の問題）淫欲への意志（第6の問題）に変え、農村を都市に隷属させ（第7の問題）、真の宗教を歪め、科学と芸術を工業と軍国主義に隷属させ（第8、9、10の問題）、自分が赤子・未成年だと自覚することなく憲法を制定し、専制を歪曲して、それにより不可避免的に人類を破滅へと導く（第11、12の問題）。⁽²⁹⁾

フョードロフによれば、この悪の源泉たる貧富の問題を解決するためには生と死の問題（復活）を解決する必要がある、そのことは残りの11の問題の解決にもつながるという。これら12の問題の多くは前期から受け継がれた問題群（学者・インテリゲンツィアと大衆との分離、自然に対する人間の態度など）だが、そこに後期になって取り上げられた専制論などが加えられて整理され、その根本に貧富の問題が据えられている点にこの著作の特徴がある。

また、『超道徳主義』の後半部では、ニーチェやカント、トルストイ、ドストエフスキー、ソロヴィヨフ、リッチェルといった面々に対する批判が加えられている。それらは、当時のフョードロフの仮想敵を知る手がかりでもある。

以上の検討から、後期フョードロフの思想の特徴が浮かび上がってくる。まず指摘しなければならないのは、キリスト教的概念と科学的知見が組み合わせられた前期のアイデアを継承しつつも、後期の著作群では、その時代の出来事や言説を一部は受け入れ、また一部は批判するというかたちで思想の内容が充実してゆくということである。それは、当時の社会的、政治的問題への言及が増え、また同時代の言説がしばしば参照されていることに顕著に見出される。

本稿で扱った著作で言えば、すでに述べたように、『兄弟性に関する問題』の第1章は1891年の飢餓とアメリカで行われた降雨実験のレポートに着想を得ている。『教会統合の計画』は当時話題となっていた復古カトリック教会と正教会との接近に触発されたものであり、後半部はソロヴィヨフの『中世的世界観の没落について』（1891年）への反論である。『専制』を構成する三つの論の内、第二の「『ロシアとは何か』という問いへの答え」は、ソロヴィヨフの『ロシアとは何か』に対する返答であった。そして、続く第三の小論「専制」では、「ロシアの君主制の諸表象を国家的現象の諸表象として体系化した最初の試み」⁽³⁰⁾とされる Н. И. チェルニャーエフの『ロシアの専制について О русском Самодержавии』（1895年）や А. А. キレーエフと С. Н. トルベツコイとの論争などに言及しており、フョードロフが専制やツァーリに関する当時の言説に注意を払っていたことがわかる。このように、この時期フョードロフは様々な分野の事象をみずからの思想の中心（復活の思想）と照らし合わせることで、みずからの思想を説明し、正当化しようと努めていたと考えられる。

こうした傾向と並んで、後期の著作には「共同事業」概念の充実とでもいうべき傾向も見られ

る。フォードロフにとって「共同事業」を遂行することと「復活」を達成することはほぼ同義だが、実際には「共同事業」は「復活」より上位の概念であり、そこには他にも軍事技術を気象統御に転用するといったアイデアや全人類の統合といった諸々のアイデアが含まれ得る。後期の著作では復活説を擁護・説明するためか、それを取り巻く「共同事業」が中心的テーマに据えられたものが多い。そして、こうした「共同事業」の前景化は、前期の『兄弟的關係についての問い』の第4部後半で見られたような極端な復活説への言及を相対的に後景化させることにつながっているとも考えられる。

もっとも、それは後期のフォードロフが従来の復活説を捨て去ったことを意味しているわけではない。復活の科学的方法論についての言及は後期にはあまり見られなくなってくるが、例えば最晩年の『超道徳主義』には、「ある面からすると、飛散したものを集め、分解したものを結合することで、すなわち父達が生前に持っていたのと同じ父達の肉体を組み立てるために、外界の分子や原子全てを、もちろん、万人を介して、認識し統御することの実現が可能であり、またそうすることが必要だ」⁽³¹⁾という一文が見られる。恐らくフォードロフ本人はその人生の終わりまで何らかの方法により復活を達成するという考えを捨てていなかったと思われるが、具体的な復活の方法を示すことは後期のフォードロフにとって著述の中心ではなくなっていく。では、そのような変化が生じた背景にはどのような要因が考えられるだろうか。以下ではその点についていくつかの要因を挙げておこう。

3. 後期フォードロフの思想形成の要因

3-1. 出版の意図

まず考慮しなければならないのは、前期と後期では著述の動機が大きく異なるということである。フォードロフは80年代まではドストエフスキーやトルストイ、ソロヴィヨフを介してみずからの思想を伝えようとしていたが、90年代以降はその望みを捨て、みずから出版物などでその思想を世に問おうとしていたという⁽³²⁾。そのことは、90年代以降のフォードロフの著作の対象が不特定多数の読者であったということの意味している。それに対して、前期のテキストは、上述のように、ドストエフスキー個人にみずからの思想を説明するために著されている。

こうした動機の差異は、例えば『兄弟性に関する問題』の構成について考える際に重要である。ドストエフスキー個人を読者として想定した結果、『兄弟性に関する問題』の第2部では、1878年のペテルソン宛ての書簡でドストエフスキーが興味を示した復活説をキリスト教的諸概念の解釈から説明し、続く第3部ではドストエフスキーが政論で述べていたようなロシアの全世界的使命やコンスタンチノーブル領有論を思わせるテーマを扱い、最後にフォードロフ特有の科学的知見に基づく復活の具体的方法を扱う第4部へと至る流れでテキストがまとめられている。それに対して、ドストエフスキーの死後書き加えられた第1部では、より多数の人々の関心に訴えるよ

うな飢餓の問題や、それに対する方策を講じない学問や哲学への批判といった、より一般的なことがらから説き起こしている。このように、前期と異なり、後期のテキストが何らかのかたちで出版され不特定多数の人々の目に触れることを意識して書かれているという点は、前期と後期の傾向の違いを説明する際に考慮すべきであろう。

3-2. ソロヴィヨフの影響

フョードロフのテキストを1881年を境に二分するならば、ソロヴィヨフの影響も見逃すことはできない。1881年までに書かれた原稿（ペテルソンの言を容れるならば、第2部冒頭部を除く『兄弟性に関する問題』の第2部から第4部）を読んだソロヴィヨフは、1882年1月12日付の書簡においてフョードロフを自らの「教師」と呼び、その思想を「キリストの道に沿って人間精神が前進する最初の動き」⁽³³⁾と評価した。一方、それとは異なるニュアンスが同年の書簡に見られる。ここでソロヴィヨフはフョードロフのラディカルな復活説を掣肘して、次のように述べている。

目的は、人類の個々の構成物の単純な復活ではなくて、それを然るべきあり方で復元することにある […] そのことに貴方は完全に賛同されます。それは貴方ご自身の思想なのですから。しかし実のところ、それなら次のようになると私は思うのです。もしも人類の然るべきあり方（死者の復活と未来世の生において人類がそうなるような）がまだ期待されるものにとすぎず、現実のものでないならば、然るべき人類のイメージにもとづいて現実の人類について判断することはできません […] われわれは皆まだ子供なので、外的な宗教による子供の養育が必要なのです。したがって、われわれは肯定的宗教や教会に、復活や来るべき神の国の端緒や範型を見出すだけでなく、この目的へ向かう真の（実践的な）道や現実的方法をも見出すのです。そのため、われわれの事業は科学的な性格ではなく宗教的な性格をもたねばなりませんし、あれこれ議論を交わすインテリゲンツィアではなく信仰をもつ民衆に立脚しなければならぬのです。⁽³⁴⁾

フョードロフにとって、このソロヴィヨフの批判はそれまで抱いていたみずからの思想に対して他者から浴びせられたはじめての批判となったと推察される。以降、フョードロフは事あるごとにソロヴィヨフに言及し、彼が復活を現実的なものと考えていないと批判を繰り返すことになるが、その一方で、この事例は自説を語ることへの慎重さとより説得的な叙述の必要性を考慮する契機となったとも考えられる。このように、後期の著作には、否定的なかたちとはいえ、ソロヴィヨフの影響があったと考えることができる。

3-3. コジェヴニコフの影響

1894年頃からフォードロフやペテルソンとの協力関係を築いていったコジェヴニコフは、フォードロフの死の間に遺稿を預けられ、ペテルソンとともに『共同事業の哲学』の編纂にあたるなど、ペテルソンと並ぶフォードロフの弟子の筆頭格とみなされてきた。しかしながら、A. B. シュルガイヤやC. Γ. セミョーノヴァが指摘しているように、実はコジェヴニコフはフォードロフの思想全体を受け入れていたわけではないということが、書簡などから明らかになっている⁽³⁵⁾。

実際、フォードロフ存命中の書簡には、フォードロフやペテルソンがこうしたコジェヴニコフの態度について言及したものがいくつか見られる。例えば、1898年の書簡でペテルソンはフォードロフの心境を代弁して次のように述べている。「東方に出立される前に送られた貴方の書簡はニコライ・フォードロヴィチ [フォードロフ] をひどく怒らせました。それは貴方が復活についての論を非キリスト教的だと仰っているからです。直接そう仰っているわけではありませんが、貴方の言葉からの直接的結論はそうになり、どんなに望んでも、そこから別の結論は導けません」⁽³⁶⁾。フォードロフ自身、晩年(1902年)に書いたコジェヴニコフ宛の書簡(下書き)で、「貴方が反感を持っている説、さらに言えば、特に最近貴方と会った時に確信したのですが、貴方にとってまったく理解できない説のために、貴方はとてもたくさん私のことをしてくれました」⁽³⁷⁾と皮肉を述べている。このように、コジェヴニコフはフォードロフの死後はもとより存命中ですら、その思想を全面的に支持していたわけではなかった。

そう考えるならば、コジェヴニコフがフォードロフに協力しはじめた1894年以降のテキストには、コジェヴニコフの意向が反映された可能性があるとも考えられるのではないだろうか。ここで注目し得るのが、上述の『超道徳主義』である。この著作の前半部にあたる12の問題群(「パスハの問題」)は1900年にコジェヴニコフとフォードロフが二人で構想を練り上げたものであり、コジェヴニコフは書簡でその構成の出来栄を誉め、傑作だと評している⁽³⁸⁾。先述のように、この「パスハの問題」は貧富の問題や学問の非実践的性格、自然に対する人間の従属といった点から復活説を正当化する根拠を列挙したものであり、一見するとコジェヴニコフが構想に参加した動機は、フォードロフの復活説をより強固なものとするためであったように思われる。しかし、上述のようにコジェヴニコフがフォードロフの思想、とりわけ復活説に賛同していなかったとすれば、このときの意図には疑問が残る。

その意図は、コジェヴニコフがフォードロフの死後に著した『ニコライ・フォードロヴィチ・フォードロフ——出版された著作と出版されなかった著作、往復書簡、個人的な対話にもとづくその教説の著述の試み Николай Федорович Федоров: Опыт изложения его учения по изданным и неизданным произведениям, переписке и личным беседам』(1908年)で明瞭になる。この本でコジェヴニコフは具体的な復活説については触れず、既存の西欧合理主義哲学や机上の学問、経済

や法、政治、ヒューマンズ的倫理観への批判などをフォードロフに読み込み、その思想の長所を能動的な事業の哲学、具体的には自然への能動的態度の内に見出している。つまり、コジェヴニコフはフォードロフの思想の意義を復活説の具体的方法に見出したのではなく、それを支える思想的・哲学的知見に求めたのである。そう考えるならば、復活説の正当性の説明を試みた「パスハの問題」はコジェヴニコフの意図に沿ったものであったともいえよう。

また別の事例を引くこともできる。1893年にコジェヴニコフはフォードロフの影響の下、トルストイの『無為 Неделание』(1893年)を批判する小冊子『無目的な労働か「無為」か事業か Безцельный труд, «не-делание» или дело?』⁽³⁹⁾を出版したのだが、その際、フォードロフにも同じテーマで出版を勧めている(結局は検閲に差し止められ出版はできなかった)。ここでのテーマはトルストイの「無為」に対して「事業 дело」(コジェヴニコフは「労働 труд」という語を用いている)を対置することにあつたのだが、それは、先に述べた前期と後期の差異を念頭に置くなれば、やはり復活説を避けながらコジェヴニコフ自身が妥当だと判断する限りにおいて(この事例では事業の哲学として)フォードロフの思想を世に出そうとする意図があつたと解釈することができよう。このように、後期の著作には、部分的とはいえコジェヴニコフが落とした影を見出すことが可能だろう。

4. 思想の区分と後代の評価

以上のように前期と後期の著作にはある程度の傾向の違いを見出すことができるわけだが、冒頭で触れた20世紀前半におけるフォードロフへの評価を鑑みると、この差異は意義深い。

ブルガーコフは『黄昏ざる光 Свет невечерний』(1917)においてフォードロフの思想に潜む唯物論的性格や、経済(хозяйство)概念を通じてマルクス主義と類似性があることを批判したが、その後の『社会主義の魂 Душа социализма』(1931)では一転してマルクス主義に対抗し得るキリスト教思想としてフォードロフを評価した⁽⁴⁰⁾。ブルガーコフと同様に、ユーラシア主義左派においてもフォードロフの思想はマルクス主義を克服しうる能動的なキリスト教思想、「行動」の思想として受容された⁽⁴¹⁾。また、このときユーラシア主義左派にフォードロフの思想を紹介したセトニツキイは、貧富の問題(つまり経済的問題)を生死の問題に置き換えることで解決するという着想を高く評価した。そして、ベルジャーエフはフォードロフの終末論や、その思想に見られるロシア的性格、人間に与えられた能動性を評価し、一方でその理性主義的楽観主義や宗教的な物質主義・自然主義には批判を加えた⁽⁴²⁾。

これらの事例は、復活説に顕著に見られるフォードロフ思想の極端な科学的・物質主義的側面ではなく、経済的問題の解決やマルクス主義との類似、あるいは人間に与えられた能動性、能動的キリスト教といった文脈でフォードロフを評価するという、フォードロフ受容における一典型を示している。こうした傾向は、先述のコジェヴニコフの書『ニコライ・フォードロヴィチ・

『フォードロフ』により整理され、可視化されたフォードロフの思想の特徴でもあり、さらに元をたどれば、フォードロフの後期テキストの特色へとさかのぼることができると考えられる。

一方、ペテルソンはトルベツコイやゴロヴァネンコとの論争において、前期のテキストで強調されている科学的・物質主義的復活説や特徴的なキリスト教解釈を前面に押し出した結果、批判を招くことになった⁽⁴³⁾。フォードロフの思想が唯物論的に解釈されやすいという危険性についてはブルガーコフなども警鐘を鳴らしているところだが、そのもっとも取扱いに注意すべき側面をペテルソンは曝け出してしまったといえる。

このように、フォードロフのテキストの前期と後期の傾向の違いは、その思想の普及活動に際してペテルソンとコジェヴニコフがとったアプローチの差異と符合する点が多い。こうした符合の理由は、長年フォードロフと共に活動してきたペテルソンと、90年代になって彼らに協力するようになったコジェヴニコフではフォードロフと共有した時間の長さや時期が違うという点や、フォードロフに出会うまでは革命活動家だったペテルソンと、後にモスクワ宗教アカデミーの会員となったコジェヴニコフでは思想的傾向が異なるという点に見出すことができるかもしれない。またそうした両者の経歴や考え方の違いを考慮するならば、J.A. コーガンが述べているように、ペテルソンやコジェヴニコフとフォードロフとの関係は、一方的に教を垂れる教師とそれに耳を傾ける弟子といった関係ではなく、それぞれの時期に「各人がこの結びつきに何か自分のものを持ち込んだ」⁽⁴⁴⁾ような関係、まさしく「共同事業」であったと考え、そこに上述の符合の理由を求めるべきなのかもしれない。

結 論

冒頭で述べたように、本稿の目的はフォードロフのテキストを成立年代にもとづいて区分可能なものとみなすことで、後に表面化するコジェヴニコフとペテルソンのフォードロフ理解の違い、さらには20世紀前半のロシア思想史におけるフォードロフ評の一因をフォードロフのテキストそのものに求めることにあった。本稿ではフォードロフのテキストを便宜的に前期と後期に分けることで、みずからの「復活」の思想にその当時の話題など様々な要素を取り込み、より説得的な形へと変化させていったフォードロフの思想形成の過程を追った。さらにそうした変化の要因として、テキストの読者（初期のドストエフスキー、後期の一般読者）の問題を指摘し、またソロヴィヨフやペテルソンコジェヴニコフといった、フォードロフを取り巻く人々や時代背景からの影響についても指摘した。それはすなわち、フォードロフの思想には彼の生きた時代との対話の痕跡が見られるということの意味している。

ただ、本稿ではフォードロフへの評価から遡って問題提起を行ったこともあり、『共同事業の哲学』に収録されず出版されなかったテキストを殆ど扱っておらず、また紙幅の都合により検討対象からはずれた著作もある。これらについても検討を続け、本稿で得られた結果をより精確な

ものとすることは、論者が今後行うべき作業であると考えている。

注

- (1) ロシア思想史におけるフョードロフへの評価や彼が与えた影響については、次の資料を参照。*Семенова С.Г.* *Философ будущего века: Николай Федоров*. М.: Пашков дом, 2004. С. 499—518.; *Семенова С.Г., Гачева А.Г.* *Философ будущего века (личность, учение и судьба идей)* // Н. Ф. Федоров: Pro et Contra: В 2 кн. Книга первая. СПб.: РХГИ, 2004. С. 23—92. 飯島康夫「フロロフスキーのフョードロフ思想批判について」『ロシア思想史研究』第4号、ロシア思想史学会、2007年、413-426頁。
- (2) 小俣智史「1900年代から1910年代にかけてのフョードロフ受容」『ロシア思想史研究』第2号（通算第6号）、ロシア思想史学会、2011年、13-31頁。
- (3) См.: *Федоров Н.Ф.* *Собрание сочинений*: В 4 тт. М.: Прогресс (Т. 1—Т. 2), Традиция (Т.3—Т. 4), 1995—2000. この4巻本全集には補遺（2000年出版）がついている。本稿ではフョードロフのテキストについては基本的にこの著作集から引用することとする。
- (4) *Петерсон Н.П.* Заметки по поводу статьи кн. Е. Трубецкого—«Жизненная задача Соловьева и всемирный кризис жизнепонимания»—в «Вопросах Философии и Психологии», сентябрь—октябрь 1912 года // *Вопросы философии и психологии*. №118. Май—Июнь. 1913. С. 406. 強調は引用元による。
- (5) *Федоров Н.Ф.* *Вопрос о братстве, или родстве, о причинах небратского, неродственного, т. е. немирного, состояния мира и о средствах к восстановлению родства* (Записка от неученых к ученым, духовным и светским, к верующим и неверующим) // *Федоров. Собрание сочинений*. Т. 1. С. 90.
- (6) Там же. С. 92.
- (7) Там же. С. 138.
- (8) ここで言う「衛生問題」とは死者の埋葬および死体の腐敗に起因する疫病の問題のことを指す。
- (9) ワシーリー・ナザロヴィチ・カラージン（Василий Назарович Каразин、1773-1842）はロシアの科学者であり、ハリコフ大学の創設者。彼が唱えた気象コントロールのアイデアはフョードロフに影響を与えている。
- (10) *Федоров. Вопрос о братстве* // *Федоров. Собрание сочинений*. Т. 1. С. 250.
- (11) См.: *Семенова. Философ будущего века*. С. 30.
- (12) *Федоров Н.Ф.* *Небольшой эпизод в истории Москвы 1892 г. или колоссальный проект* // *Федоров. Собрание сочинений*. Т. 4. С. 16.
- (13) *Федоров Н.Ф.* *Заметки личного характера* // *Федоров. Собрание сочинений*. Т. 4. С. 165.
- (14) *Петерсон Н.П.* *Из воспоминаний о Федорове* // Н. Ф. Федоров: Pro et Contra, Книга первая. С. 133-134.
- (15) См.: *Семенова. Философ будущего века*. С. 28.
- (16) *Федоров. Вопрос о братстве* // *Федоров. Собрание сочинений*. Т. 1. С. 260.
- (17) 他にも分量の多い論文はあるが、本稿で取り上げる『兄弟性に関する問題』、『教会統合の計画』、『専制』、『超道徳主義』の4つの著作は『共同事業の哲学』第1巻の冒頭から4番目までを占めていることから、編纂者であったベテルソンとコジュヴェニコフから見ても重要度の高い論文であったと考えられる。
- (18) そのことを裏づけるかのように、この加筆箇所の後にはあらたに第1節から第24節までの節が続いている。先述のベテルソンの証言から、この後に続く箇所が1881年当時のテキストだと考えられる。
- (19) *Федоров. Вопрос о братстве* // *Федоров. Собрание сочинений*. Т. 1. С. 69.
- (20) ここで祖先崇拜を強調して扱っている背景には、1890年からフョードロフの同僚としてルミャンツェフ博物館に勤務することになる中国学者 Г. П. Георгиевский（Григорий Петрович Георгиевский、1866—1948）などの中国研究の影響があったと考えられる。1888年12月22日付のベテルソン宛の書簡でフョードロフは、ゲオルギエフスキーやフランスにおける最新の中国研究に言及し、「中国の文字（漢字）に関する分析

には、祖先崇拜や芸術の起源、さらには衛生問題について手稿で述べたことを立証するようなことがらが多く見いだされる」(Письмо Н. Ф. Федорова Н. П. Петерсону от 22 декабря 1888 г. // *Федоров. Собрание сочинений*, Т. 4. С. 224—225.) と述べている。

- (21) *Федоров*. Вопрос о братстве // *Федоров. Собрание сочинений*, Т. 1. С. 40.
- (22) Там же.
- (23) Там же. С. 47.
- (24) ただし、「現実的復活」や「生命の返還」、「内在的復活」といった表現は見られる。
- (25) *Федоров Н.Ф.* Проект соединения церквей // *Федоров. Собрание сочинений*, Т. 1. С. 370.
- (26) フョードロフのテキストを見ると、この講演の題名は『中世的世界観の没落の諸原因について О причинах упадка средневекового мирозозерцания』となっている。これは、フョードロフが直接ソロヴィヨフの講演を聴講したわけではなく、翌1892年に出版されたものを参照していることをあらわしている。
- (27) *Федоров Н.Ф.* Самодержавие // *Федоров. Собрание сочинений*, Т. 2. С.4.
- (28) Там же.
- (29) *Федоров Н.Ф.* Супраморализм, или всеобщий синтез (т. е. всеобщее объединение) // *Федоров. Собрание сочинений*, Т. 4. С. 410.
- (30) *Смолин М.Б.* Спасительная Реакция и идея Монархии // *Черняев Н.И.* Мистика, идеалы и поэзия русского Самодержавия, М.: Москва, 1998. С. 10.
- (31) *Федоров*. Супраморализм, С. 421.『超道德主義』においてこうした記述が見られる箇所は、コジェヴニコフが構想に参加した「パスハの問題」以外の部分であり、おそらくは彼が関与することなく書き足されたと思われる。
- (32) См.: *Федоров Н.Ф.* Собрание сочинений: В 4 тт. Дополнения. Комментарии к Т. 4. М.: Традиция, 2000. С. 411.
- (33) Письмо В. С. Соловьева Н. Ф. Федорову от 12 января 1882 г. // Н. Ф. Федоров; Pro et contra. Книга первая. С. 100.
- (34) Письмо В. С. Соловьева Н. Ф. Федорову (июнь—июль 1882 г.) // Там же. С. 101—102. 強調は引用元による。ソロヴィヨフは「復活」という語を用いる際にフョードロフのタームである «воскрешение»ではなく、「воскресение»を用いていることを付記しておく。
- (35) Переписка П. А. Флоренского и В. А. Кожевникова (предисловие А. В. Шургаия) // Вопросы философии. №6. 1991. С. 91.; *Семенова С.Г.* Николай Федоров: Творчество жизни, М.: Советский писатель, 1990. С. 152.
- (36) Письмо Н. Ф. Федорова, Н. П. Петерсона В. А. Кожевникову от 8 июля 1898. // *Федоров. Собрание сочинений*, Т.4. С. 335.
- (37) Письмо Н. Ф. Федорова В. А. Кожевникову (Апрель—Май 1902 г.) (черновое) // Там же. Т. 4. С. 261. 強調は引用元による。この書簡が実際に送付されたかどうかは不明。
- (38) Письмо В. А. Кожевникова Н. Ф. Федорову от 28 июля 1900 г. // Там же. Т. 4. С. 596.
- (39) *Кожевников В.А.* Безцельный труд, «не-делание» или дело?: Разбор взглядов Эмиля Золя, Александра Дюма и графа Л. Н. Толстого на труд, М., 1893.
- (40) この点については冒頭で触れた拙論の以下の箇所であつた。小俣「1900年代から1910年代にかけてのフョードロフ受容」22-27頁。
- (41) この点については以下の拙論であつた。小俣智史「ユーラシア主義左派におけるフョードロフ主義——『ユーラシア』紙をめぐる」『ロシア文化研究』第17号、早稲田大学ロシア文学会、2010年、1-15頁。
- (42) См.: *Бердяев Н.А.* Религия воскресения («Философия общего дела» Н. Ф. Федорова) // *Бердяев Н.А.* Мутные лики (типы религиозной мысли в России). М.: Канон+, 2004. С. 5—63.
- (43) Горованенкоとの論争については以下の拙論であつた。小俣智史「Горованенкоによるフョードロフ批判——『神学報知』誌における批判記事をめぐって」『ロシア文化研究』第19号、早稲田大学ロシア文学会、

2012年、17-31頁。トルベツコイとの論争については冒頭で紹介した拙論の以下の箇所で扱った。小俣「1900年代から1910年代にかけてのフォードロフ受容」19-21頁。

- (44) *Коган Л.А.* Неизвестный Петерсон: Начало пути (к вопросу о неоднолинейности истории) // Вопросы философии, №9, 2002, С.133.